

「郷土」の発見と近代文学——描かれる「故郷」から語られる「郷土」へ

松本博明

- I、「故郷」ということ
 II、個別個有の「故郷」から共有される「故郷」へ——宮崎湖処子の『帰省』から
 III、わが身入れ難き「故郷」——石川啄木の「故郷」
 IV、享受される「故郷」——「故郷」の正典化
 V、「郷土」の発見——あるべき姿の「故郷」として
 VI、「故郷」の「郷土」化

I、「故郷」ということ

「故郷」という言葉を考える場合、この言葉の持つ二つの位相を心にとめなければならぬ。それは「個」の問題と「共同性」の問題である。「故郷」と言う言葉は、きわめて個的に、個有のものとして機能するが、しかしそれは同時にその個有感覚の均一性、普遍性、共有性を示す言葉としてもある。「故郷」という言葉を使用した場合、この二つの位相が二つながら抱え込まれるらしいことが、問題を複雑にしているのではないだろうか。「故郷」という言葉が、このような二つの位相を抱えるようになったのは、一体どのような経緯からであろうか。

文学作品の中では「故郷」は、基本的に「描かれる」あるいは「語られる」という営為によってわれわれの前に提示される。描かれあるいは語られた「故郷」は、しかしひとたび享受される段階において、個有の「故郷」としてではなく「共感性の共有」の力を発揮する。「個別個有」と「共有」という二つの感覚が言葉の中に分かちがたく保持されているこの「故郷」と言う言葉に、さらに「郷土」という言葉が加わると、話はさらに複雑になってくる。ここは、「故郷」「郷土」ということを改めて整理してみる必要があるだろう。

本稿は、近代文学において、「故郷」あるいは「郷土」はどのようにして発見されていったか、いくつかの作品を題材に検証するとともに、「故郷」から「郷土」へ、内容としての「ふるさと」を提示するための言葉が次第に変容する過程には、「ふるさと」そのものがかかえこむ感覚が「個」から「共同体」へと変移していく諸相が認められること、それが「故郷」の「正典化」という問題と相俟って「郷土」という語彙の「発見」に結びついていったことを、跡付けるものである。

まず「故郷」という言葉から整理してみたい。

II、個別個有の「故郷」から共有される「故郷」へ——宮崎湖処子の『帰省』から

「故郷」という問題を考える上でしばしば引用される作品として、宮崎湖処子の『帰省』がある。作品そのものの評価や内容の分析をすることはせずに、ここでは、この小説の中で「故郷」がどのように捕らえられ、また表出されているかについてだけ確認していきたい。

周知の通り、この小説は、宮崎自身が仮託されたと思われる語り手「我」が、出郷後六年ぶりに福岡県甘木近郊の村咸宜（三奈木）に帰省を果たす様子を描いた作品で、当時の青年、特に地方出身の在京青年に圧倒的な支持を受けたという。本文は、帰思、帰郷、吾郷、吾家、郷党、山中、恋人、追憶、離別の九章から成り、第一章、第二章を除いてほぼ全編「我」のまなざしによって捉えられ描かれる「故郷」そのものの景観あるいは風景に満ち溢れている。「故郷」を捉えるきわめて敏感なまなざしがそこには横溢しているのである。つまり、「故郷」を捉え描くことが、この小説における、一つの主題であったといえる。

故郷へあと一里ほどの町甘木に着いた「我」は、昼食のためにしばらくそこで休憩をする。いよいよ出立の時に臨んで、車夫は、まるで「故郷」へ入る「我」を導く道行きの先触れのごとく、わらじを変え、顔を拭き、手ぬぐいを頭に巻き、身なりを整えて轡を握るとい「儀式」めいたことをする。そうした「儀式」を経た後、「故郷」に入った「我」は、

ア、嬉し、今よ故郷は吾目に見へぬ。^③
と叫び、ふるさとの台地に接吻をするという行動に出る。このいささか大げさな行為は、さながら古代の国見の儀式のようでもあり、「見る」という行為を聖化するたためことぶれのようなものもある。この儀式におびかれるように、「故郷」に入った「我」は、「故郷」の景観をあふれんばかりのまなざしで見続ける。

村の門は太と快よく我を迎へぬ。其は路の両端より老ひ立ちたる楡樹にして、茂れる枝は双方より我頭上に結びぬ。辺を青めし其緑色は、直下の樹陰の涼味を加へ、其真上に当りて密樹の間より窺く日影は、宛も散れる落葉の如く、片々地上に黄布しつ、（中略）其盤根は昔より村児の椅子、老人の曲泉、旅客の坐床なりしが為め、孰れも皮もなくなりて老いしが、今も尚ほ変ることあらず。^④

斯くて翌朝疾く起きて前夜の路に馳せ出づれば、弦月形に吾村を懐きし大仏、鬼城、片峯、小隈等、北の方なる一百峯、依然たる旧容は、猶ほ朝日の影白光の幕に眠り、暖々たる清岩寺は暁鐘を打ち初めたり。今は唯其太陽直下の顧にのみ、眼の華に似たる空焰残りき。諸山の暁色に夜は明けて一百峯は磨くが如き唇顔を頰し、炊烟深处に認むる山村、野水、縦横したる曲処に見ゆ

る水郭、長堤、之を聯ぬる暁の露、平野に溢る、秋色は、満眼故郷の幻姿なりけり。^⑤

今秋の田は稻生ふる頃にして、見ゆる限りは青穂なりき。^⑥（後略）

吾前に横たはれる白壁処々、茅屋斜々、断郭稜々、それを綴る緑竹青樹南北長く互れるものは、愛らしき吾故郷なり。^⑦

（傍線は全て筆者）

さらに「吾（我）」のまなざしは、自らの「故郷」にとどまることなく、母の「故郷」である隣村、佐田村にも同様に注がれる。

此より北方愈々上りて愈愈なる自然の裡に、廻溪を過ぎ、遠林を穿ち、險峯攀じ、深壑を俯し、村閭なる独木橋を過ぎて、昼猶ほ冥き洞道に入れり。五十歩過ぐると思ふ頃、豁然として路開ければ、眼中の烟村、是れぞ我武陵桃源なる佐田村、吾母の故郷なりける、（後略）

こうした「故郷」へのまなざしは、「故郷」の景観だけではなく、そこに住む肉親や恋人の一挙手一投足にもそそがれる。

我は今吾幼弟が他の室より恥かし気に我を眺めつ、又吾眼線を避くるを認めたり。^⑧

我が故郷の快樂は、今や恋の幻影によりて高まりぬ。^⑩

其の一人——吾訪問の最初の主眼、——最後の主題、——吾意中の幻影、——理想の天女、情人たる褒似は、恐らく笑顔を蔵す能はざるべし。^⑪

（傍線は全て筆者）

いま、語り手「我」にとって、「故郷」はまさに「見る」ものとして存在する。帰省する以前に、東京に寄宿している「我」にとって、しばらく見ぬ故郷はまる

で「幻影の如く油然として」私の脳裏に浮び来る、いわば幻視の対象であった。

生活の道漸く開くるに及んで、故郷の幻影油然として復活し来れり。¹²

宛も故郷の春の幻姿なるを見て、遂に又左の如く記しぬ。¹³

凡ての故郷に関せる如何の一語は、多様の音色、汎種の形影に回転して、遂に其夜の夢にも入りぬ。¹⁴

(傍線は全て筆者)

それはかつて自らのまぶたに焼き付けた「故郷」の原風景であり、春の装いであり、また郷語の音色であり、またかつての恋人の姿であった。それは、時には「我」の求めに応じて、あるいはゆくりなく「我」の脳裏に出現する好ましいものとしてあり、それらを自らの目と心で再確認することこそが、今回の帰省の主題であったわけだ。それが証左に、帰省の途次、馬関(下関)において「我」は、故郷に帰る「疎族の一少年」に遭遇し、彼から故郷の様子を聞かされるのだが、その際「我」は、「吾眼光を以て之(故郷)を覩る迄は、他の先入を容るまじと決心¹⁵」するほどに、故郷の姿を自分の目で見ることに執着するのである。

博多の港についた「我」は、六年前、上京する際に泊まった宿に再び投宿する。その主人が「我」を覚えていないことに残念がる。故郷咸宜(三奈木)に入っても、「我」の願は東京の客にも都人にもあらで、故郷の我として帰省し、唯唯年長けたる我として接待せられんこと¹⁶とつぶやく。更にそうした故郷への期待は、逆に競馬見物の歓声を自分を歓迎する声と思ひ誤らせたりする。にもかかわらずなおそのまなざしは、「今なお変わる事無き」村の門、楡の樹、に向けられ、日中の村の様子を独語しては、自分を歓迎する人の姿を捜し求める。出郷後思いえがいた「故郷」を捜し求めるために、「我」の感覚は、研ぎ澄まされて「故郷」に向けられている。「故郷」は、決してゆりかごではなく、ある意味では「我」の神経を容赦無く消費しなければ描写し得ない場として、そこにある。

出郷し、再び「故郷」に戻った者のまなざしは、まるでよそ者の如く「故郷」の景、かつて自らの目に焼き付け、耳に留めた風景やひとびとの言葉遣い、あるいはしぐさなどに注意深く向けられ、そこに「自己」と「同一」するものを見出

そうとしている。が、それは、東京で思い描いた「故郷の幻影」のようには、「我」の求めに応じて立ち表われることなく、「我」の心にしっくりと適う好ましいものとしては存在しない。それは、語り手の「故郷」に対する更なる溯及を呼び、「我」は母のふるさとである佐田村へと導かれることになる。

このように「故郷」に降り立った「我」にとって、「故郷」は、語り手「我」の目によって様々に見出され、描写される。その描写は「故郷」を離れる直前まで続く。そしてそれらは、やがてことごとく「幻影」として表出されるにいたる。

短か夜は更け易く、楽む時は疾く流れて、(中略)唯黙視の室、幻影の座、恋の夢の時間のみぞ残れる。¹⁷

斯くて故郷の快楽、恋愛の希望、自然の景色、漸く画卷の捲き尽され、幻影の醒めゆく如く移る裡に、我は父の死後、吾家の境遇のいと転変せるを認めたり。¹⁸

別けて夜の夢は昼猶は幻影を浮べ。鳥啼の一声すらも世界の変故を告る如く聞へしなり。¹⁹

回顧すれば是迄送り来りし兄弟は、此より去りて空しく眼中の幻影となりぬ。尚ほ往くほどに、郷党も亦去りて幻影となり、我同年の友は我を送り来ること二里、亦去りて幻影となりぬ。今は我家を出づること三里、車を停めて顧望すれば、吾故郷も亦幻影となり、暫く見えて亦消へぬ。²⁰

(傍線は全て筆者)

ここで表出される「幻影」という言葉の意味する内実は、東京において「我」の心に到来した「幻影」とはいささか異なるだろう。東京において私の脳裏に現れた「幻影」は、咸宜(三奈木)に帰省すれば確認できるものとしてあった。しかし、咸宜に戻った「我」によって表出される「幻影」は、実際目に見えるものではないながら、なぜかことさらに「幻影」と表現される。ここでいう「幻影」は文字通りの「幻影」である。つまり存在しないもの、実際見、そしてつかむことの出来ないものとして「故郷」は「見られて」いる。東京で脳裏にゆくりなく現わ

れた「幻影」は今醒め行くものとしてあった。大地に接吻し「実や此処に我は「故郷」の我なりき」と叫び、過剰なほどの自意識を持って「故郷」に対峙する、あるいは故郷の、「我」を歓迎する人々との対面によって、「故郷」の「我」に対するまなざしを強く感じ、「故郷」と同化する感慨に浸りながらも、究極同一化をしえぬまま故郷を再びあとにする事になるが、しかしながら、「幻影」として脳裏にありつづける。この二つの意味の異なる幻影によって「我」は二つに引き裂かれつつ、しかし「故郷」という存在に二つながら抱え込まれたまま宙ずりになる。

前田愛が「明治三三年の桃源郷」で指摘したように、「我」の生活の現実が東京にあり、この「故郷」は「我」にとつてかりそめの宿りに過ぎないからか、あるいは、この小説は単に「故郷」そのものの実態よりも「故郷」についての「我」の意識を記録することが主題だったからか、「我」の意識はこの際どちらでもいい。「我」は「故郷」のありようを精一杯描きながらも、しかし常につかむことの出来ない「幻影」と捉え、表出するしかなかったこと、これがこの小説のいわばもうひとつの主題であろう。

言うまでもないことであるが、「我」が個別個有に有する「故郷」と、それを題材としながら表出し読むものに提供された「故郷」とは、おのずから異なる。「我」が「描こうとする故郷」は、「我」のまなざしで十二分に捉えられ、様々「故郷」に風景を支えられながら表出されるが、しかし湖処子において別のベクトルによってからめとられ再構成されたとき、すでに「我」の「故郷」ではなく新たな意味を付加されている。

「我」が描く「故郷」、その表出の始原は「我」個有のものであるが、「我」が「幻影」として捉える「故郷」は、すでに「我」のものとしてはなく、「多くの我」によって共有される「故郷」の姿だったのである。

つまり、こうして個別個有の「故郷」が、出郷者によってことごとく「幻影」と捉えられる可能性が指摘できる。個別個有の持ち物としてあった「故郷」は、描かれることによって、その上にさらに共時的概念をかぶらされてゆく。個別のものとしてあるはずの「故郷」、脳裏にまざまざと浮かび上がるものでありながら、しっかりと捕捉できないものの意味として、「故郷」が描かれるとき、また作者は、そうした概念を、「故郷」にかぶせることによってのみ、引き裂かれた「故郷」を再確認できるのであって、「幻影」としての「故郷」を擬似故郷として

共有することで初めて、「故郷」は、「我」によって再確認されるのである。

Ⅲ、わが身入れ難き「故郷」——石川啄木の「故郷」——

石川啄木の『一握の砂』に収められた一連の「故郷歌群」及び「日記」、「洪民日記」などに描かれる「故郷」についても同様のことが言える。次に石川啄木の「故郷」について一瞥しておこう。

「故郷」洪民は、啄木の五尺の身を入れ難き場所としてあるが、その「故郷」に対する感懐も、またそれによって詠われる「故郷」洪民も啄木個有のものである。

啄木の明治三十五年秋の日記「秋韻笛語」から、東京に寄宿して後の、彼の述懐を追ってみよう。

この日記には、新しい居所への期待と共に、「故郷」に対する溢れんばかりの恋慕の情があちこちに顔を出す。特に、彼と「故郷」を結ぶもの、湖処子の言葉借りるならば、彼に「故郷」の「幻影」を「見させる」装置は、「故郷」からゆくりなくもたらされる「故郷」の人々からの書簡である。

十一月六日朝。小林花郷君の書状は杜陵より……（中略）……「秋は冷たく光りなく白壁をさぐる如くとやああわが故郷!!!。健全なれよ友!」「午時。「太古の遺民、猪川浩兄よりは杜陵吟社の諸兄と共に原兄及び余が出京の際撮影せると、小沢兄よりはユニオン会同人と共に去る卅一日うつしたると、共に郵送し来る。漸くうすれ行く面影をまた新たにしたる心地して嬉しきこと限りなし。……かくて来春の再会をたのしまむ」「想ひは家郷にあり」。

十一月八日 「田鎖徹郎端書して、阿倍君の肋膜炎にかゝり岩手病院に入るを報じ来る。写真を取り出てその凛々しき面影を見想ひは想ひを駆りて吾は遂にはかなくも懐郷の念にうたれぬ。」

十一月十三日 猪川箕人からの手紙に対しては、「初夏の丑みつ時の寂寥を

破りて兄と中津川畔のベンチに道徳を論じニイチエを説きし日もありきよ、その夜の月今も尚輝れり、あ、吾のみ百四十里の南にさすらひて、故友となる、この悲愁⁽²⁶⁾」

十二月一日 堀内鍊三、「あ、汝故郷よ。岩峯の銀衣、玉東の白袖、夫れ依然として旧態の美あるか。江東嘗而、故郷を論じ「形逝いて神遊ぶ」と云へり。宜なる哉。郷村不段の自然の靈、今尚ほ、清秀の趣を湛えて、初冬の瀨氣、朴直の農人の胸に呼吸せらるるか。吾たえずあ、吾堪えず。(中略)嘗而従兄と山野に獵す。雪鞋氷を踏んで寒林に佳禽をさぐる。往くく山深くして自然の形神威あり。徐に故郷の山川を眺望して精氣脈管に迸り出を覚えき。野鷄足下の叢を出で、飛ぶ。高翔の摧羽響、尚耳にあり。あ、されど吾は巷街の塵に歩むを如何せん。」

挙げていけばきりはないが、こうした限りない親和を持って、吾心に来る「故郷」の面影は、しかし啄木個有のものであつて、それ以外のものではない。こうした「故郷」に対して、それから四年後の明治三十九年、「洪民日記」に記述される「故郷」は、以下のように描かれる。

家並百戸にも満たぬ、極く不便な、共に詩を談ずる友の殆んど無い、自然の風致に優れた外には何一つ取柄の無い野人の巢で、みちのくの広野の一寒村である。(中略)：新住地として何故に特にこの僻陬を撰んだか。それは一言にして尽きる。曰く、洪民はわが故郷―幾万里のこの地球の上で最も自分と関係深い故郷であるからだ。「故郷」の一語に含む甘美比ひなき魔力が、今迄、長く、深く、強く、常に自分の心の磁石を司配して居たからだ。(中略)故郷は実に無限の魔力を以て我が全心をひき付けて居たのである⁽²⁷⁾。

いささか長い引用になったが、東京の繁栄と興奮とを体験した啄木にとって、東北の一寒村である洪民は、このように弁解がましく述べなければならぬほど、住むには悲しすぎ、さびしすぎたのか。こうした「故郷」という現実に向き合ったとき、啄木は別の「故郷」、即ち「故郷」とはこういう物である、「故郷」とはこういう意味である、「故郷」とはこうであらねばならぬ、という、いわば「故

郷観」を示す必要を生じたのだろう。彼はこう続ける。

故郷の空気の清浄を保つには、日に増る外来の異分子共を撲滅するより外に策がない。清い泉の真清水も泥汁に交つて汚水に成る。自然の平和と清浄と美風とは、文明の進入者の為に刻々荒らされて、滅ぼされていく。髭の生えた官人が来た、鉄道が布かれた、商店が出来た、そして無智と文明との中間にぶらつく所謂田舎三百なるものが生れた⁽²⁸⁾。

今日、小児らと共に寺の小僧が来た。無論他郷者である。自分は今迄これ位厭な卑俗な人相を見た事がない。年は十八だとか。その又音声の厭な事。これも悪むべき進入者の一人である。よしや彼が一つの悪事をも成さなんだとしても、純朴な郷人の心には、彼のこの卑俗な人相を一見しただけでも、恐るべき悪感化が刻まれるのだ⁽²⁹⁾。

彼等の生活には詩がない。詩のない幸福!あ、若し自分が一瞬たりとも彼等の平安を羨ましいと思う事があるなら、それは自分に取つて最大の侮辱である。何と言ふ事であろう。自分が今度この故郷の住人に成つたのは、果して彼等と同じ平安、彼等と同じ幸福を得んがためであつたらうか。否、否、否⁽³⁰⁾。

(傍線は全て筆者)

啄木にとって決定的な悲劇は、自らが「文明の進入者」の一人であることに気づいていない点なのだが、啄木によってここで発見されている「故郷」は二重に彼を引き裂いている。啄木のまなざしの先に求められているのは、自分が記憶するかつての「ふるさと」であり、そして同時にもう一つは東京の興奮を経験した啄木が夢想するあるべき姿としての「故郷」でなければならぬ。この二つの「故郷」いずれも喪失しているのが、啄木の「見た」故郷洪民であつた。啄木によつて幻視される「故郷」とは今の洪民ではなく、この「あるべき姿の故郷」としての洪民でしかない。

個別個有の「故郷」は、こうして描かれることによつて、初めて描き手にとつて抜き差しならない「故郷」として再確認されるが、しかしそれはまた、こうし

て様々に作品化され提示されることで、「享受」の対象となりうる。つまり、個別個有の「故郷」に対して、「享受」すべき「故郷」が、ここに生れるのである。啄木の日記が、日記というよりむしろ公開を予期した作品であることを考慮に入れれば、やはり故郷洪民は啄木によって「あるべき故郷」として提示されたものであるといえる。

この二つの要素を入れ子型に抱え込みながら、二つの「故郷」は描かれ続けるのである。

IV、享受される「故郷」——「故郷」の正典化

そうしたことは、すべての出郷者において言えることだろう。

「帰省」のなかで描かれる「我」、あるいは「故郷」は、柳田國男が晩年「故郷七十年」で述懐したように、この時代、明治二、三十年頃の出郷者たちにとって共通した故郷観であったようだ。この小説が、出郷者たちに大きな支持を受けたことは、よく指摘される。

以下は、柳田國男の述懐である。

「帰省」といふ本は、理想の細君をもらふといふだけのことを書いたものであるが、この中に出て来る「故郷」といふ概念は、あの自分の若い者の考への、代表的に表はされたものであった。(中略) この中にいふ「故郷」が、今私が「故郷七十年」の中でいつてゐる「故郷」といふ概念に似てゐるやうな気がするのである。せんじつめると、どこが故郷のいゝところか、故郷とはどこまでいゝものか判らないけれども、帰つてみれば村の人はみな知つてゐて、お互ひの気が口に出さなくとも通じるとか、中には子供で別れたのがもう大人になり、細君になつてゐるといつた、センチメンタリズムもあるが、宮崎君はそれを忠実に書いたのである。

「故郷」が「故郷」であり続けること、それはその描き手が出郷者であり続けることとほぼ同義であるが、それぞれの人々にそれぞれの「故郷」が存在すれば、同時に、これら出郷者すべてに共有される「あるべき故郷」の姿が自ずから要求されるであろう。

個別個有の「故郷」という語になぜ「共感性」がはらまれるか、それは、「個別個有の故郷の喪失」という問題が、「描かれる」という行為によって示される「あるべき故郷」に対してのみ、はじめて意味を持つからである。

結局、湖処子にしても啄木にしても、故郷喪失という個人的問題が、故郷の物語を書かせ、又詩を歌わせることになったわけだが、故郷喪失の体験で言えば、播州辻川から、府川へ、そして布佐へと遍歴した柳田にとって、より切実であったろう。故郷が喪失する物であれば、出郷者は喪失した故郷に代わる「あるべき故郷」を新たに作り上げようとするだろう。

そうした「故郷」の創出については、例えば成田龍一が「故郷という物語」の中で、故郷喪失の場面を様々あげ、その分析の中で故郷をアイデンティティの場としてとらえ、その喪失と回復の過程で「構成された空間」、つまり「物語られた空間」としての「故郷」を提示、その疑似故郷こそが故郷観念の本体であろうと述べている。そして同郷会などの出現、あるいは愛郷心涵養の場としての「故郷」の再生産といった試みは、その実体化であるという見解を述べている。更には様々な「故郷」に関する言説、そして歌・文学、そうしたものすべて「故郷の物語」創出の試みとする考え方をしめしている。

しかしこの考えにはいささか疑問が残る。まず、「故郷」という言葉の成立と成長、変容についての分析が欠けていること、出郷者と在郷者の存在、その意識の差異について全くふれようとしないこと、「郷土」と言う言葉の吟味が決定的に欠落していることなどがあげられる。「故郷」になぜ共感性が孕まれるのか、その「故郷」がなぜ「郷土」という語と結びつくのか、そもそも「故郷」と「郷土」とは同じ概念なのか異なる概念なのか、「故郷」「郷土」それぞれの言葉の吟味が不足しているために、その個別性と共有性の問題が明らかになっていないばかりでなく、「故郷」「イコール」「郷土」とすることによって、「疑似故郷」「イコール」「郷土」と結びつけてしまった点に問題があった。

「故郷」と「郷土」は、それぞれ別次元に生成された語であったはずである。それが次第にそれぞれが共通にはらむ「共感性」という問題で結びついて、「あるもの」を示す同義に偏ってきたものと思われる。

「故郷」が共感性を持ちうる一つの方向は、たとえば柳田に次の発言によってあらわになる。

利根川の河口から十七里、八里も上った府川の辺りを、白帆をはった川船がひんぴんと通る日の風は、あの付近ではイナサと呼んでいた。「良いイナサが吹く」といえば、風が海の方から吹いて来ることを指していたのである。わたしはイナサという風の名を初めて耳にした時、非常に深い印象を受けた。それからこの方イナサという言葉をきくといつも府川のころの少年の日を思い出す。子供の私が大利根の白帆に驚き、イナサの名に強く心をひかれてから、その後少しでもこれに似かよった言葉があると、すぐ結びつけて考へるのが常となつた。しかし一歩進んで沖繩にも類似の言葉があつたらと思ひはじめたのはさう古いことではない。

個別個有の「故郷」、それと同じものが日本の他の地域に存在しないのか、と思考する心性。柳田國男の「故郷喪失体験」と新たな故郷創造の意志が、「郷土」の生成という方針を促し、そこにあるべき日本の田舎の姿を見出すという道筋を支えていく。

つまり、「共同体認識」としての「郷土」という語彙は、個別個有の「故郷」「ふるさと」を再構成するための概念語として創造され、柳田によつて、民俗学というゆりかごの中で育成されていくのである。

日本民俗学の初期の思想に、国民国家論を背景に「古きよき日本の発見」というテーマがあつた事は、柳田が初期に費やした「山人」発見への情熱、そしてそれを継ぐ折口の「まれびと」発見への道程などを見れば、首肯されるであろう。柳田にとつては、「郷土」が、あるいは「郷土研究」という取り組みの中で、「故郷」のあるべき姿として発見されて行く道すじは容易に推測できる。

こうしてあるべき姿としての「故郷」は、明治後期から大正にかけて、「故郷」の正典として位置付けられていった。その一つの例をここに挙げておこう。

兔追ひしかの山
小鮎釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

如何にいます父母

恙無しや友がき
雨に風につけても
思ひいづる故郷

こころざしをはたいて
いつの日にか帰らん
山はあをき故郷
水は清き故郷

(高野辰之作詞、文部省唱歌 故郷—大正三年四月)³⁶

文部省唱歌「故郷」——日本人であれば、恐らく知らない者はないであろうと思われる有名な唱歌である。ここにうたわれた「故郷」は、全て個別個有の記憶によつて支えられている。いうまでもなく「し」という個別個有の体験を強調する助動詞とともに描かれる故郷、すなわち作者である高野辰之の故郷長野県飯山の情景である。それは常に「山川草木」という自然物と、そこに暮らす父母、友人といった人間、この二つによつて構成されるということは、湖処子や啄木の例でも見てきた。そして、「故郷」は、今は離れているけれども「必ず帰る場所」として位置付けられる。そしてその「帰る場所」は、あくまで「山青き、水清き、変わらぬ父母、友がきの居る故郷」でなければならぬ。しかしそうした「故郷」が、すでに存在しないとすれば、これは高野によつて幻視された「故郷」、つまり「あるべき故郷」の姿に他ならない。柳田が、

故郷は時として広い世間よりも早く変わっていたからである。何の断りもなく田舎は進んだ。それが東京化ではなかつたまでも、少なくとも心の故郷は荒れたのである。それを知らずに帰去来の辞は口ずさまれていたのである。故郷の山河は明らかに美しく良くなっていた場合でも、なお決して以前のままとは言えなかつた。多くの記憶の裏切られていることが、普通には零落の感をさえ抱かしめたのである。(中略)村が経済的には衰えなかつた場合に、なおわれわれの古い故郷は、退歩しなければならなかつたのである。³⁷

というように、変わってしまった「故郷」に対して、こう「あるべき故郷」は、

出郷者すべてに共有されるものとして幻視される。

そして、この「ふるさと」という歌は、唱歌としての地位をあたえられることによって、それを聴く人々が、それを「あるべき故郷」の姿として聖化し、正典化した。さらに、「ふるさと」とはかくある物であるという様式は、この歌によって、出郷者のみならず、次第に在郷者によっても共有されていくことになる。「かの川」は個別個有の川ではなく、それを享受するものすべての「かの川」になった。

V、「郷土」の発見—あるべき姿の「故郷」として

ここで「故郷」という言葉から少し離れて、「郷土」と言う言葉がどのように近代において生み出されたかについて、その道すじを大まかにたどっておこう。

このことについては、すでに以前述べたことがあるが、「郷土」ということを近代の概念として新たに発見したのは新渡戸稲造である。

新渡戸はその著『農業本論』（明治三十一年）の中で、国民の衛生、人口、風俗人情、政治思想など様々な分野から、農業を基本とする「田舎」の持つ可能性を検証し、「地方学」ということばを用いて、はじめて「田舎」を研究する学問の必要性について説いた。なかでも、第二章「農学の範囲」において、

余は「地方学」と呼ぶもの、中に、習慣を容れて研究し、習慣の然る所以を洞見し了るの必要あるを信ず。³⁹

と述べ、ドイツやイギリスのように、田舎における風俗、歴史、言語、いつてみれば地方における旧慣の研究を積み上げることが、農業哲学、田舎文学、農民心理学ともいべき学問の発展を促し、それらが更に農学の発展にも寄与することになると説いた。

『農業本論』は、「地方学」の意義について総括的に言及するに止まったが、その後、明治四十年二月に行われた中央報徳会例会の講演会で語られた「地方の研究」において、新渡戸は「地方学」について様々な方面から解説を試みている。

地方はヂカタと訓みたい。凡て都会に對して、田舎に關係ある農業なり、制度なり、其の他百般の事に就きて云へるものにて、夫を學術的に研究して見たい考で、謂はゞ、田舎学とも稱すべきものである。⁴⁰

「農業本論」「地方の研究」^{チカカ}いずれの文章にも、「郷土」ということばは一切使用されていない。しかし、後年の新渡戸の述懐などを総合すれば、この「地方学」こそ、「郷土研究」「郷土学」の提唱であったことは明らかである。⁴¹

この思想は、やがて、新渡戸邸で開催される「郷土会」の基本的なスタンスとなり、やがてそれは柳田国男の「郷土研究会」へと引き継がれて、地方研究の一つの方向として認知されて行く。

この地方研究の枠組みを支えたもの、つまり地方へのまなざしというものの背景には、以前述べたように、明治期の政治状況もさる事ながら、その学問状況を念頭に置かねばならない。それは国民国家形成に為に打ち出された様々な方針と、それを支える思想としての学問である。

国民国家論の台頭とその進展に伴って、日本の国家とはなにか、国民とはなにか、その枠組みを提示する必要性に迫られたために、いきおいそれを内胚する周縁というものにまなざしが向いたという時代背景がある。もちろん、新渡戸の発言や行動は、日露戦争による地方の疲弊、それに対応するように地方活性化のために推進された地方改良運動とそのいきづまり、更には、その運動に対する柳田をはじめとする当時の若い農商務官僚たちによる新たな方向性の模索と規を一にしている。しかしそれはあくまで皮相的な流れであって、それらを支えた学問、思想上の基盤を考えなければならぬ。

この時期、「国文学」あるいは「国語」が発明され、さらには「国文学史」「国史」が系統立てられる。中央を相対化する形で、またそうした学問対象の揺籃として「周縁」が見出されていったことが大きな要因としてあげられる。つまり、志田義秀による「民謡」の発見や、民衆、民俗と言葉の発明。そして『帝國文学』⁴²『人類学雑誌』などの学術雑誌は、こぞって周縁地域へまなざしを向けはじめた。金田一京助らによる「アイヌ研究」、伊能嘉矩の「台湾の土俗研究」、金澤庄三郎の「朝鮮日本語同祖論」⁴³などにみられように、周縁への志向が地方研究を背後で支えていた。

そうした研究の、最も大きな考え方の基礎は、「民衆の精神が、民衆の中に書かれた物に先行する形（口承、言い伝え、村のあり方（行政区画でない精神的な枠組み、などなど）民俗学の領域たるもの）」で、見出せると言う確信⁴⁴であり、そうして見出されたものの中に、国民国家の始源の思想を発見できると言う更な

る確信であり、またそうしたものは「地方」により深く沈殿していて、地方研究、つまり郷土研究によって明らかにしようという予測であった。そして、「地方」（つまり新渡戸の言によれば「ぢかた」「郷土」）は、「郷土研究」によって、あらたに再発見されるという確信であった。その領域は、すべて、出郷者における「故郷」に他ならなかったのである。

VI、「故郷」の「郷土」化

個別個有の感覚を抱えている「故郷」という言葉のほかに、「郷土」という概念語を出郷者は獲得した。ここで、「故郷」と「郷土」という言葉の概念がせめぎあっている例を見てみよう。

岩手県教育会から昭和五年に発行された『郷土読本』下巻の中で、金田一京助が石川啄木の歌碑建設完成に寄せた言葉である。

十年の歳月がいつか流れて過ぎた。そしてこの十週年の忌日を期して故郷の北上川の岸に、故郷の人々の手によつて啄木記念碑が建てられるといふ快報に接した。私はいひ知れぬ感懐に双頬を伝ふ涙をさへ覚えたのである。抑へがたい私の愉快は第一にこの建碑の運動が、年若き郷土の青年の手に成ることだった。會では詩人が五尺の身を容れ兼ねた故郷の地に、十年の歳月の流れる間には少年の心が成長しつゝ、あつたのである。啄木の霊を郷土へ帰らせよといふ叫びが、まづ在京の学生の間に挙つた。これらの人々は固より世事には無経験で、目算などは始めから無かつたのである。その代りに為さんとする事に尻込みすることを知らない真率さと、元氣とを持寄つて起つたのである。雨の日風の日厭ひなく奔走した半歳の涙ぐましい努力が、終に美しく報いられたつたのである。その運動の何等地方的私心を雑へぬ至純な動機からであつた証拠には、皆盛岡に縁故のある人々でありながら、盛岡へは建てずに洪民へ建てようとするでもわかるのである。⁽⁴⁷⁾

啄木の歌碑建設は東京在住の岩手県出身の学生たちの發議で、盛岡在住の有志と共に組織された「啄木会」⁽⁴⁸⁾が中心となつて大正十一年四月三日に建設された。建設の当日、洪民村青年会の決定によつて、村内各戸から一人ずつの計約二百人

の村人が動員されたという。この金田一の發言は、大正十一年四月十三日、この歌碑の完成除幕式において述べられたものである⁽⁴⁹⁾。

この發言を見ると、出郷者と在郷者との力関係の逆転がここで起つてることがわかる。「故郷」の郷土化には、出郷者の力があり、それが在郷者を動かしたことが述べられているが、それは、「帰省」や「一握の砂」や「洪民日記」が書かれた時代ではありえなかつたことだ。ここにおいて、啄木の「故郷」はある權威の衣を着せられて、「郷土」として再構成させられている。石もておわるる如くして「故郷を後にした」出郷者啄木の「故郷」、しかしこの「故郷」を郷土化する、つまり「あるべき故郷」として再構成するのに、まず手をあげたのが、在京の出郷者であつたということは、象徴的である。こうして、「故郷」は權威を付与され、「郷土」として、新たに発見され、そうして權威の衣をまとわされながら、外部の向けて「語られ」はじめるのである。そしてそれは、出郷者のみならず、在郷人にとつても、「あるべき故郷」――正典化した「故郷」をふるさとの側から「郷土」として裏返しに発見したのであり、そしてそこにも同じように正典として權威が付与されていく。金田一京助は、そうした郷土を語る「語り」の場に自ら立ち会つていくことになる。

あるべき「郷土」への權威性の付与、つまり正典としての「郷土」の生成、そうした状況への、まったく逆の視点からの反措定が、鈴木彦次郎の小説「巨石」⁽⁵⁰⁾であつた。先の啄木歌碑建立から材を得たものであるが、この小説が、大正十五年五月、つまり啄木歌碑建立の日とその場で話された金田一京助の談話が『郷土読本』に載る時期とのちょうど中間に發表されている点はきわめて興味深い。この小説がどのように「郷土」という問題と切り結んでいるかということについては、須藤宏明氏は次のように述べる。

村にとつて排除すべき翠江という存在は、容易に祭り上げる存在に轉換する。村にとつて必要なはその存在に付加価値的に与えられた權威であるから、その轉換が可能になる。村にとつて必要なは權威という役割であつて、翠江という個の存在の内質にあるのではない。翠江の内面の心情としての〈詩〉が必要なのでなく、外部から与えられた權威としての〈詩〉が必要なのである。その權威としての象徴としてあるのが、「翠江記念碑」という歌碑なのである。⁽⁵¹⁾

確かに、さきの『読本』に載ったのは、啄木の作品でもなんでもなく、啄木を顕彰した出郷者、そしてそれに呼応した在郷者の行為そのものであった。しかもそれを語ったのは、啄木ではなく、彼を庇護した金田一京助であったことである。ここで象徴的なのは、この詩人、ここでは啄木であるが、その権威が外部から付与されているということ、その外部とはだれであろう、出郷者であることは注目されている。アイデンティティー確立に悩み苦しんだ、出郷者の故郷は、「郷土」として創造されたのである。

「郷土」という権威性に捕捉される啄木の作品、かつて、五尺の身を入れ難かった故郷、その悲しみ、個別個々の悲哀をうたった啄木の作品は、やがて、その故郷観念を共有する出郷者、そしてそれを「郷土」と読み換える在郷者の一群とよって、石に刻まれて、いま北上河畔に立つ。「郷土」の権威性への反措体としてやはり出郷者鈴木彦次郎によって、「巨石」の中にこの事態が取り込まれる逆説。

文学作品の中で「郷土」がどのように「語られて」いくのか、文学の中に語られるはじめる「郷土」の問題について、次は考える必要がある。

【付記】本稿は、平成十三年八月二日、盛岡大学を会場に開催された「日本近代文学会平成十三年度北海道・東北地区研究集会」において、同題で研究発表した際の発表原稿に基づいています。席上、貴重なご意見、ご指摘を賜りました野坂幸弘先生はじめ諸先生方に感謝申し上げます。

注

(1) ここでは、あえて「固有」ではなく、「個有」という語彙を使用する。「固有」とは、一般的に元からあるもの、もちまへのものを意味する。しかし、個人的記憶あるいは体験に基づいた「故郷観」を示す場合、それは「個人個人が個別に有するものであって、言葉そのものが内包する「固有の観念」の意味ではない」という考えからである。

(2) 宮崎湖処子「帰省」は、明治二十三年六月、民友社から刊行された。本稿で使用した本文はすべて『明治文学全集』第三十六卷「民友社文学集」(筑摩書房、昭和四十五年四月)に拠った。

(3) 宮崎湖処子「帰省」。『明治文学全集』第三十六卷、P四九、L(行)上段
二五

(4) 同、P四九、L下一六〇二二

(5) 同、P五一、L下一〇〇一六

(6) 同、P五二、L上六

(7) 同、P五二、L上二四二二五

(8) 同、P六八、L上二二二二六

(9) 同、P五〇、L下一三二一四

(10) 同、P六四、L上一三二一五

(11) 同、P四五、L上二三

(12) 同、P四五、L上二八二下一

(13) 同、P四六、L上七二八

(14) 同、P四六、L下一九

(15) 同、P四九、L下二二二三

(16) 同、P六六、L下二五二二六

(17) 同、P七四、L上六二八

(18) 同、P七七、L上一七二一八

(19) 同、P七九、L上三二五

(20) 同、P八四、L下二二二五

(21) 前田愛「明治二三年の桃源郷」——柳田國男と宮崎湖処子の『帰省』(前田愛著作集)第五卷、P二一八)

(22) 石川啄木「秋韻笛語」(『啄木全集』第五卷、筑摩書房、昭和五十一年)

同、P一三、L上一二二一三

(23) 同、P一三、L上一二二一三

(24) 同、P一四、L下一二二一九

(25) 同、P一九、L下一六二二二

(26) 同、P二八、L上九二二二

(27) 石川啄木「淡民日記」(『啄木全集』第五卷、筑摩書房、昭和五十一年)、
P六三、L上一二二二一五

(28) 同、P六七、L上一四二一九

(29) 同、P六八、L上四二九

- (30) 同、P六九、L下一四〇一九
- (31) 柳田国男「湖処子の帰省」(『故郷七十年』、昭和三十四年十一月、のじぎく文庫、後「定本柳田国男集」別巻三、筑摩書房、P二二一〜二二二)
- (32) 成田龍一「故郷という物語」(平成十年七月、吉川弘文館)
- (33) 「故郷」と「郷土」という語の生成、変容については、拙稿「郷土」から「郷土研究」そして「郷土文学」へ(1)(2)(『岩手郷土文学の研究』第一号、平成十二年一月一日。『同』第二号、平成十三年三月二十日)
- (34) 柳田国男「イナサ(東南風)」(『故郷七十年』、前掲注(31)と同じ。P二〇〜二二二)
- (35) 柳田国男における山人発見の情熱に関しては、赤坂憲雄「山の精神史」(平成三年十月、小学館)後藤総一郎編「柳田国男伝」(昭和六十三年十一月、三一書房)など多くの論考が指摘するところである。しかし、柳田の山人発見への情熱は、いわば時代の要請であり、同じ時期あるいはその後大正年間にかけて折口信夫の「まれびとの発見」あるいは品田悦一が指摘するようにアララギなどによる「万葉集の発見」、そして「民俗周縁の発見」などのいわゆる「近代における発見の物語」の一章であると考えられる。しかしながら、その「発見」の文脈が、やがて民俗学生成の助走となっていくということについては留めておきたい。なお、折口信夫の民俗学的発想の生成を基本軸に、民俗学全般の近代における生成の必然性を視野に入れた考察については、筆者が日本民俗学会第五十八回年会(平成十三年十月七日、帝塚山大学)において「折口信夫の民俗思想―「郷土研究」そして「古代研究」」と題する研究発表を行なっている。この発表を核として、民俗思想の分野から近代の「発見の文脈」を位置付けた考察は、別稿を用意したい。
- (36) 高野辰之「故郷」(大正三年四月文部省唱歌)。明治三十五年暮れに発覚したいわゆる教科書疑獄を契機に、文部省は教科書国定化の勢いを強め、翌一月には、早くも小学校教科書国定法案が帝国議会に上程された。高野は前年四月から、文部省国語教科書編纂委員として嘱託され、また翌年四月には、国定教科書の第一号である『尋常小学読本(一)』が完成。その四年後、文部省唱歌編纂係と東京音楽大学助教教授を兼ね、官製唱歌の編纂作業が本格化してゆくことになる。
- (37) 柳田国男「故郷・異郷」(『明治大正史世相編』、昭和六年、朝日新聞社、本稿では、講談社学術文庫版『明治大正史世相編』新装版に拠った。)
- (38) 前掲注(33)
- (39) 新渡戸稲造「増訂農業本論」(『新渡戸稲造全集』第二巻、昭和四十四年七月、教文館)。
- (40) 同「地方の研究」(中央報徳会例会講演)明治四十四年二月十四日「中央報徳会例会講演」(『斯民』第二編第二号、明治四十年五月、後「随想録」に改稿収録。『新渡戸稲造全集』第五巻、昭和四十五年八月、教文館)
- (41) 同「郷土を如何に観るか」(『郷土』第一号、昭和五年十一月)他
- (42) 志田義秀「日本民謡概論(一)(二)(三)」(『帝国文学』第十二巻第二号、第三号、第五号、第九号、明治三十九年二月、三月、五月、九月)
- (43) 「帝国文学」には、前注以外にも「民謡」「民衆」「周縁」をキーワードとしうる論考が明治三十年代頃から四十年代にかけて多く見られるようになる。例えば高木敏雄「羽衣伝説の研究」(第六巻第三号)「浦島伝説の研究」(第六巻第六号)、「琉球に伝はる羽衣伝説」(第六巻第七号)、松平円次郎「津軽方言考」(一)(二)(三)(第七巻第二号、四号、五号)「郷土芸術論」(一)(二)(第十二巻第四号、五号)など。
- (44) 「日本国内諸人種の言語」(大正一年、東京人類学会)「北蝦夷古謡遺編」(大正三年、甲寅叢書一、郷土研究会)『あいぬ物語』(大正三年、博文館)をはじめ、のちに「アイヌの研究」(大正十四年)「アイヌ叙事詩ユーカラの研究」(昭和六年、東洋文庫)などに結実する諸論考。
- (45) 「台湾番人事情」(明治二十八年)「巡台日乗」などの調査記録。
- (46) 「日本文法論」(明治三十六年十月、金港堂)「日鮮同祖論」(昭和四年十二月、刀江書院)
- (47) 金田一京助「啄木の碑」(『郷土読本』下巻、岩手県教育会、昭和四年)『郷土読本』および岩手の郷土教育については、拙稿「岩手の「郷土」教育序説―「岩手教育」にみる「郷土」教育の変遷」(『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』第二号、平成十二年三月)。
- (48) 「啄木会」こそ、「郷土」という概念で結ばれた組織であったといえる。成田が故郷再生の実体化としてあげた「同郷会」といささか異なるのは、出郷者と在郷者とを二つながら抱えてこんでいるという点である。そして、それを支えているのが、啄木が「描いた故郷」である。

(49) 啄木の碑の完工式については、吉田弧羊新編『啄木写真帖』（昭和四十八年九月、画文堂）に詳述されている。

(50) 鈴木彦次郎「巨石」（『虚無思想』第一卷第二号、大正十五年五月）

(51) 須藤宏明「巨石論」（『岩手郷土文学の研究』第一号、平成十二年一月）

A Study of Additional Meanings and Acceptance of the Words

'kokyo' and 'kyodo' in the Post Meiji Period

Hiroaki MATSUMOTO

In this study, I have examined differences between the words 'kokyo' and 'kyodo' through analyzing some works of the Meiji era of Japan, for example, *Kisei* by Koshoshi Myazaki and *Ichidoku-no-suna*, *Sibutami-nikki* by Takuboku Isikawa. Thorough this examination, the true meaning of "Kokyo" and "Kyodo" is made clear.